

## 第4・5号：教育機関連携事業とは？

～今後の展望と合わせて～

2026  
No.4

### Pickup! ニュースレター第4号発行にあたって

2025年度も、まもなく終わろうとしています。年度末は、振り返りや次年度に向けた準備などで、何かと慌たしい時期ですね。気持ちよくスタートがきれるように、今できることを一つずつ丁寧に進めていきたいと思います。本号は、ニュースレター第4・5号の合併号となります。今回は、教育機関連携事業の取り組みと、今後の展望を記載しています。これまでニュースレターでは、SV事業やアセスメント事業を取り上げてきましたが、発達障害支援事業において中核をなしているのは、「教育機関連携事業」です。とりわけ中心となるのは大学との連携です。大学は、学生が社会へと移行していく大切な時期と考えられます。生活の構造が大きく変化し、自ら進路を選択していく過程において、戸惑いや不安を抱える学生が多くいることを事業を通じて実感しています。そうした中で、外部の就労支援機関として関わることには大きな意義があると考えています。本号では、これまでの取り組みを整理し、今後の展望につなげることができればと思います。ぜひご一読いただけますと幸いです。

### Challenge! 教育機関連携事業について

JASSO（日本学生支援機構）が実施した2024年度の悉皆調査によると、日本の大学に在籍する学生のうち、障害のある学生の割合は1.7%（55,510人）と報告されています。これは、合理的配慮の提供や診断書の提出などを通じて、大学側が把握している学生数に限られた数字です。診断の有無にかかわらず、学生生活上で何らかの困りごとを抱えている学生の実数は、さらに多いと考えられています。とりわけ精神面や発達特性に関する困りごとは、生活構造が大きく変化する大学生活を契機に顕在化することも少なくありません。診断を受けて間もない学生もおり、自身の特性と向き合い、理解を深めていく「自己覚知」の只中にある状況が想像されます。そのような学生が、安心して学生生活を送り、自らの可能性を広げながら将来を描いていくためには、大学内外の支援機関が有機的に連携していくことが重要です。

教育機関連携事業は、2015年度に学生支援活動としてスタートし、就労支援で培ったノウハウを教育現場に還元することを目的に展開されています。現在、関西圏を中心に10を超える大学と連携し、各大学のニーズに合わせた支援を提供しています。本事業の柱は以下の3つです。

- ・ 「働く」を支援するための情報提供や自己理解を深める講座の提供
- ・ インターンシップ（企業実習）の提供
- ・ 就活に関する相談対応

主には、大学内のキャリアセンターや障がい学生支援室と連携を図りながら、学生にプログラムを提供しています。昨年度、日本財団の助成もあり、関西圏から出て、活動の範囲が全国に及びました。コミュニケーションやビジネスマナー、認知行動療法に基づくス

トレスマネジメントや問題解決訓練など。さらにはGATBや困り感尺度といった検査を活用したアセスメントまで、大学や学生のニーズに応じて提供する内容は多岐にわたり、柔軟に組み立み合わせながら実施をしています。次年度はファイザープログラムの助成を受け、中高生向けのキャリア支援プログラムの開発にも取り組むこととなりました。これは、近年の就労支援における課題の一つである「支援の低年齢化」への対応を見据えた取り組みです。本人への支援と合わせて、保護者への支援もプログラムとして行っていく予定です。これまで培ってきたノウハウを土台に、着実に形にしていきたいと考えています。

学生の時期は、社会への移行期であり、自ら今後の人生の舵を切る重要な時期です。その中で、経験や資源へのアクセスについて、サポートを必要としている学生が一定数存在しています。法人理念である「一人ひとりの人生を輝くものに」を胸に、そうした学生にとって本事業が一つの資源になれるよう、今後も取り組みを続けてまいります。

### 教育機関連携事業のまとめ

- ・ 大学との連携
- ・ 講座やインターシップの提供
- ・ 就活に関する相談対応
- ・ 中高校生向けプログラムの開発

Closeup! 4コマ漫画



編集者のコメント

学生支援に関わっていると、ふとした時に自分も学生だった頃のことを思い出します。楽しかった思い出、少し苦しい思い出。記憶力にはあまり自信がないのですが、不思議と当時の出来事だけは鮮明によみがえることがあります。学生時代が、今の自分に少なからず影響を与えているのだと感じます。私たちは日々の経験から学びながら生活しているとも言えます。出来事の良し悪しに関わらず、積み重なり、今の自分、そしてこれからの自分につながっていきます。

今回の4コマ漫画は、学生時代の「うまくいかなかった経験」と、それを振り返ったときに「当時、相談できる人がいればよかったな」と思う気持ちを豊かに描いていただきました。皆さんも、日々の中でさまざまな出来事を経験していることと思います。立ち止まりたいときや、自分だけでは整理が難しいときに、少しでも安心につながるような相談先・身近な方の存在があればと願っています。

連載コラム！～事業への思い～④

発達障害支援事業の次の10年に向けて

JSN発達障害支援事業職員

このコラムを書いている私は10年ほど前から障害のある学生への支援に関わっています。この10年で本当に変わったな…と。まず、障害者雇用がかなり浸透されたのもあるのですが、それに伴ってか障害のある学生の新卒採用であったりインターンシップが増えたというところがあります。障害開示することへのハードルが下がったのも大きな要素です。世の中の流れは変わりつつも、障害者雇用を選ぶ学生はどれくらいいるのだろうかという疑問があります。

私は主に精神障がい・発達障がいのある学生とやり取りが多いです。やり取りの中で学生の障害者雇用に対する考えを聞きます。学生の声は、「障害者雇用の賃金が低いので悩ましい」「仕事の枠を狭められたらどうしよう」「キャリアパスがどうなんだろう」「いつか障害者手帳を返還したい」などなど、また身体障がいのある学生は通勤の大変さや働く環境で悩まれます。在宅ワークの浸透もなかなかだなあとも思います。選択肢が昔より増えているけど、まだまだ足りないところがある、ということなのでしょう。

足りなさを埋めていくことや新しいものを築いていかないと、より良い未来を繋がついていけないです。ここで、10年間の大きな収穫があります。障害学生支援に携われる支援者が増えたことです。つまりは仲間が増えた、ということですね。仲間が増えることも多くなりますから、この業界が活発になれる、その反面、昨今の就労支援施設の状態を鑑みるとやはり支援者の質も問われていくわけです。次の10年ではどう変わっていくか、頑張っていきたいと思っています。

ニュースレターに関するご意見募集！！

ニュースレターの感想、事業に関するご質問等、些細なことでもお待ちしております。どうぞよろしくお願いします。

<https://forms.gle/8AKQ7fLXVeT3t6mJ6>



事業ホームページはこちらから

<https://www.jsn-ddsd.net/index.php>



## Closeup! 振り返りと今後の展望について

今年度、試行的に定期的なニュースレター発行を行いました。「JSN発達障害支援事業に関する主たる取り組みを法人内外に広報する場を持ちたい!」、という思いから始まったものでした。一旦の区切りとして、事業についての振り返りと、事業職員からみた今後の展望について記すことができればと思います。

### SV事業の振り返りと展望

従来は、懇意のある法人・企業に出向いて、研修や事例検討会を行う形式を中心としてきましたが、今年度は大阪府内の就労系福祉サービスの支援員を対象とした連続の集合型研修を実施しました。全3回の研修に対して参加者の総計は102名となり、普段はJSNとのつながりが少ない就労継続支援B型事業所や就労継続支援A型事業所からも多くの参加がありました。また、参加者の半数以上が就労支援に携わって1年前後と経験年数の浅い支援員であり、こうした研修形態に対する高いニーズがあることがうかがえました。

一方で、参加者が所属する事業所に対して、新規で個別の研修を実施するには至りませんでした。個別具体的な課題や困りごとは、事業所や支援員それぞれに存在しているものと想像しています。特に、対人援助職の燃え尽きがクローズアップされる昨今、法人の枠を越えた横のつながりは、支援者にとって大きな支えになると考えています。

今後も、就労支援の基礎的な知識や実践を学ぶことができる場を入り口として提供し、支援者同士がつながりを持つ機会をつくっていきたくと考えています。支援に関わる方々の資源となることで、より質の高い支援が提供される地域づくりに貢献できるよう、引き続き活動を続けてまいります。

### アセスメント事業の振り返りと展望

今年度は、検査機能の拡充に向けた動きが活発化しました。WAIS-IV、GATB、AQといった従来の検査機能に加えて、学生の生活上の困りごとを扱う「困り感尺度」、ADHDの特性を背景とした状態像の重症度判定を可能とする「CARRS」、作業曲線から本人の傾向を読み解く「内田クレペリン検査」、読み書きの苦手さを把握する「RaWSN」「RaWF」など、新たな検査の導入に向けた検討と実践を進めてきました。まだ実装に至っていないものも多くありますが、本人の客観的な状態把握に対するニーズの高さを反映した結果であると考えています。

また、2025年10月からサービス運用が始まった「就労選択支援」におけるアセスメントの一端を、これらの検査機能が担うこととなりました。法人職員が日々の業務と並行して試行錯誤しながら培ってきた技術が、安定的に発揮される場が広がったと捉えることができそうです。

検査の実施や読み解きは、アセスメントの技術に直結する重要な部分であると考えています。一方で、検査だけで支援が完結するものではないということも、就労支援の実践を通してこの一年で改めて実感したところです。数値が独り歩きしない体制づくりと、より良い支援につながる実践を目指し、引き続き検査を通じた本人理解、支援の取り組みを積み重ねていきたくと考えています。

### 教育機関連携事業の振り返りと展望

新規に複数校の大学とつながる機会を得て、講座を実施してきました。また、学内の学生に対する就労に関する相談機能を請け負う形での発展も見られ、各大学との連携を強めた一年でもありました。そうした大学側からのニーズの高まりの一方で、学生個人に対するインターンシップ提供の機会はめっきり少なくなりました。就労支援として密に関わる機会が減ったことに個人的な寂しさも感じますが、学生が利用できる資源が増えてきたことの裏付けでもあるように感じています。

人手不足の情勢と雇用率の上昇も相まって、障害者雇用も売り手市場の様相を呈しています。合理的配慮を伴う働き方を考える学生にとっては、追い風と表現しても過言ではありません。しかしながら、自己理解の只中にある学生も多く、まだ働いた経験が少ない中で、自身が求める配慮を言語化することは、簡単な作業ではありません。これからの長い職業生活のスタートを切ろうと、葛藤を抱えながらも、さまざまな就労の可能性を模索している学生が多くおられます。そうした学生にとって、少しでも日々の生活の安心につながり、自らの選択で自分らしい一歩を踏み出せるように。引き続き、学生とともに揺れ動きながらも関わりを続けていきたいと考えています。

### これからの10年について

独自事業として10年、就労移行支援の職員が兼任で担ってきた取り組みが、この3年は専任体制となり、さらに拡大してきました。発達障害のある方への支援が拡充されればされるほど、本事業の存在価値をより強く感じるどころです。

さて、本事業主任にこれからの10年について尋ねたところ、次のような言葉が返ってきました。

「10年後には、各就労移行支援事業所の中に同様の機能を持つてもらいたいと考えています。事業所ごとに機能が分化していくことは、所属する支援員の技術発展の面からも望ましい形だと思います。運営としても柔軟性が増し、より良い体制につながると考えています。」

この価値ある取り組みをさらに発展的に推し進めていくために、法人内外の動きに常にアンテナを張りながら、これからも日々の業務に取り組んでいきたいと思っています。

## 編集部のあしがき

### 編集長

1年間ニュースレター発行、無事終了!

色々な工夫をしながら良く取り組んでもらいました。今後とも発達障害支援事業をよろしく願います。

### 副編集長

一年が早かったようなやっとな終わったような、そんな気持ちです。次年度も頑張っていきます。

### 編集者

ニュースレターを通して、日々の取り組みを整理する機会となりました。ありがとうございました!